

橋本喜典著『歌人窪田章一郎―生活と歌』

内藤 明

窪田章一郎には、『初夏の風』（昭和23・1）から『定型の土俵』（平成6・8）まで十冊、六一七五首の短歌作品がある。勿論、他に歌集未収歌もあるが、本書はこの十冊の歌集の流れに即して作品を鑑賞しつつ、窪田の文学の特質を明かにしようとしたものである。歌誌「まひる野」に、昭和62年4月号から平成7年11月号まで、「窪田章一郎歌集研究」の「作品の周辺」として連載したものを骨格としている。西行をはじめとした和歌史の研究者であり、また歌人である窪田の短歌は、広く読まれ親しまれ評価されてきたが、必ずしも十分論じられ、研究されてきたとはいいがたい。本書は、窪田の短歌そのものを本格的に論じた一冊の書としては、はじめてのものといえるだろう。

「あとがき」によると著者と窪田との出会いは、昭和二十三年のことであった。第二早稲田高等学院の学生であった著者は、文学部校舎の地下売店で「まひる野」という短歌雑誌を目にして、そこにならんでいる作に衝撃を受け、その発行人である窪田に会いたいと思い、雑司ヶ谷の「窪田通治・章一郎」と表札が掛かった家を訪問したという。それは、敗戦後、「物」どころついで以来、教えられ信じつづけていたものの一切が一挙に否定されてゆく中

で、内心確かな生き方を求めて苦しんでいた」著者の、「確かな生き方の指針」を得たいという気持ちからのもので、窪田が四十歳、著者が十九歳のことであったという。

ここには、その後により著者が窪田に寄せる思い、さらには短歌に寄せる信念とでもいべきものがあるといえよう。そして著者はこの「確かな生き方」への希求を、時代は違うが窪田自身の中に見ている。本書冒頭の「窪田章一郎素描」で著者は、窪田が「生くる世に確かなるもの一つをと求めて歌にめぐり逢ひし日」という自作を挙げながら短歌をはじめた頃を回想し、「戦争に入る混乱期に自立の生計も立たず、病弱でもあった時、これだけは確かなものとして自分の歌を少しづつ詠み重ねるようになった。この気持は今も変わらない」（『雪の思い出』）と語っていることを引用しながら、日中戦争下を病弱な体で生きた窪田が、「確かなるもの」として作歌と和歌文学研究を選んだことを確認する。そしてその文学者としての出発が『初夏の風』の冒頭の昭和八年秋の、

何にかもわれや足らひしわが心ほのに湧き来る楽しさのありわが心われと今知る楽しさの湧きて尽きせず絶えぬ泉と生涯の為事思へばまなかひにおのが姿のうちまもらるる

この肉体生みいだすべき何かありとらへむとして心ときめく

といった歌にあらわれていることをいう。著者は、「日本の詩歌は、作者一人ひとりが自分の思いを歌う。われ思う——これは疑いを容れ得ない、ゆえに自分は存在する。その疑いを容れ得ない

自分の思いを歌うことは、明らかに自己を認識することである。

その意味で、短歌はその作者にとって大切なものである筈だという考え方は、章一郎の内部に徐々に形成されていた」という。「思いとは生き方の謂である。章一郎が思いを歌うというとき、それは生き方の追求の意味にほかならない。生きるのは自分である以上、追求の対象は「私」である」といった一節には、著者がとらえた窪田の初志があるといつてよいだろう。

そして著者は、窪田が「求めてめぐりあつた」と語る背後に、九歳にして母が逝去し、妹とともに母の生家にあずけられ、さらに父の再婚と離婚、その母も二年後に死去、そして胸部疾患による転学や療養といった「世の不幸というべき体験」を見る。しかし、「狂気や神経衰弱とは無縁」で、先の「ほのに湧き来る楽しさ」といったよるこびの歌から文学の出発がなされたところに、その後の窪田の短歌の方向があることをいう。それは、窪田の歌に僅かに見られる、存在や家族をめぐつての闇や暗さに繋がる歌、例えば

闇の夜の山路をいそぐしばしば見る夢にしていづこと知らず

父とわれ個々にさすらふ夢を見きわれ生きをりて父を悲しむ
父と子はわかるるなくて末遂げつ苦しき愛をまもりましけむ
といった歌に注目しながら、窪田について言われる、健康、明朗、素朴、善意、平明、調和といった特徴は「人間の生きてゆくうえでの『闇』を知るゆえに光明世界に帰属するものである」といった指摘となつていく（それは「陰鬱」を忌避する志向としても語

られる）。また「艶」や「気品」がいわれる、

幼木にひとときに咲く寒椿わかき命のあふるることし

浮雲の群るるあはひに湛へたる紫紺の色にめぐりあふ天^{そら}

といった歌をめぐつて、その「艶」には俊成・定家の理想とした情緒や官能に訴え魅する美とは異なつた、さかんなる生命力への賛美があるとし、窪田の世界の美の背景に、生命力に対する精神の昂揚・緊張があるという指摘ともなる。闇を深層にもちつつ光明や生命力に向かつていこうとする意志、資質を、著者は窪田に見ようとしているといえる。

*

さて、既刊十冊の歌集から選ばれ取り上げられた一一三五首は、極力初出雑誌に当たり、時にその推敲のあとをたどりつつ、作品の背景となる時代の動きや社会状況、作者の身辺などを押さえ、窪田からの直接の聞き書きも含めて、窪田の「生活と精神の軌跡を跡づける」ものとなっている。短歌と人間とを一体化してとらえ、その生き方と関わらせながら作品を読むところに、窪田空穂以来の「態度の文芸」として短歌をとらえるひとつの流れがあるといつてよいだろう。章一郎の作品それ自体がそういった読みを求めているといえ、本書は窪田の世界をその生の起伏とともに理解することができる。それゆえ、批判・否定におもむく要素は少なく、他の作者や傾向と比しての批評的な言辞や方法的裁断は見られないが、多くの事実を提示しながら、窪田の生と思想が半世紀以上にわたる時代の推移の中でとらえられている。

また本書では、窪田の生き方が大きく取り上げられる一方、歌

の表現をとおして、窪田の世界の特徴が分析されているところも多い。例えば、四首による起承転結の連作を、窪田の歌にしばしば見られるものと指摘するとともに、それを「意図しての構成ではなく、実感の流れに添って歌いながら、おのずと成ったものである」とする。万葉にも意図的な四首連作は多く見られるが、方法に先立つ実感尊重の立場をとるところが窪田の特徴としてとらえられている。また「忘れぬしよろこびなれや光帯び群る綿雲流れゆくとき」の「なれや」に注目し、その「古典的措辞を今日の歌に生かすには一首の中で適所を得た緊密さが要求されよう」として一首を分析し、「空ひくく下りて散りばふ綿雲や冬あたたかくにはふ紅」の上句を「一見さりげないが、この単純化は余程の練達の士でなければ不可能だ」として詠嘆の「や」に着目する。窪田の平明、単純と見える世界の奥行きを支えている古典、文語の力についての分析は、現在貴重なものといえよう。

研究者としての窪田と作歌とのかわりは、大変深く、西行の生き方との関わりをはじめ本書でもさまざまに展開されるが、「寒椿幼き木よりあふれ咲き命めでたく年越えむとす」「幼木にひとときに咲く寒椿わかき命のあふるることし」について、窪田が「めでたい」は「慶事あれ」という予祝の思いだ、としばしば述べていたことと関わらせながら、前歌に「われ他人ともに嘉きことあれ」という思いを見、また後歌に「命」への賛美と羨望を見ながら、その「根底には古代の言霊信仰に通う思い」があるとする。研究をとおして培われてきた知性が自ずからのものとして、実作の表現と内容に奥行きを広げていることの指摘であり、窪田

の自然体は「数えきれぬほどの古歌を通し、近現代の歌を通して人間の心を見つづけてきた」上での「自然体」であったとらえている。窪田は、古典から近現代を貫くものとして短歌民衆詩論を展開するが、それを支えるものと、その実作におけるあらわれが、さまざまに観察されているといえよう。

戦後短歌は、第二芸術論をはじめとした短歌否定論とのあらいの中で展開され、またさまざまな方法意識によって変革を重ねてきた。窪田の短歌は、ある意味でそういったものとクロスせずに変わらぬように見えるが、本書はそういった窪田を支える歌への信念をその初志から明かにして、その展開の相を明かそうとしている。そして、向日性や平明や優美がいわれる窪田短歌の背後にある闇の部分垣間見つつ、そういった暗部を資質と知性によって乗り越え、確かなものを求めていこうとする強靱さに、窪田の文学者としての心と倫理を見ているといえよう。そこから逆に、窪田に歌われなかった世界、取られなかった方法が数多浮かんでくるわけだが、その選択にこそ窪田の意志があったといえることも思わせる。短歌否定論に対する否定を、窪田は歌いつづけることで、真つ向から行い続けて来た、そういったことが一冊を通して浮かびあがる。本書はそういった窪田の意志と、その和歌伝統に根ざした短歌の世界を明かにして、激しく変貌する今日の短歌に対して、静かな問題提起をおこなっているといえるかもしれない。今後の窪田章一郎研究の礎となる一冊である。